

## 第六十六 嫁の宣告

大原は心の苦みに堪へざる如く幾度か溜息を吐き、「小山君、君の奥さんには先日鳥渡お話し、たが僕の郷里に年頃の従妹がある、即ち本家の娘だ、その本家から僕は今迄學資を半分づ、助けて貰つたが、本家の両親は行く、其娘を僕に呉れ度いと云ふ下心らしい事は僕も先年歸省した時始めて推測した、僕の両親も多分其事を承知して居るらしく思はれる、然し僕に向つて今日迄未だ公然の發表も無いから僕は其の相談を受けない内に早く東京で嫁を極め度いと思つて居たのさ、最も去年中から卒業祝ひには是非一度歸れと毎度の催促が来るけれども今歸ると其相談を受けるに違ひ無いと思つて歸らずに居た、昨夜中川君の處から此へ歸つて来て、モ一此方の事は極まつたから郷里の両親へ委しい手紙を出して婚禮の承諾を受度いと思つて居たところ郷里から至急の手紙が来て愈よ従妹の一件を宣告された子、モ一少し早く僕が手紙を出して置くとまだ宜かつたけれども手後れになつた為め向ふの方に先んぜられた、此に手紙があるから讀んで呉れ給へ、その通りの言渡した、去年中から頻りに歸國の事を申し遣はして今か々と待つて居たけれどもそちらにも忙しい事があつて歸れないと云ふのは是非も無い、今迄和郎の歸國を促したのは豫ねて和郎と本家のお代さんとを婚禮させる事に話しが極まつて居る、和郎が歸國したら卒業祝ひを兼ねて立派な婚禮式をさせる積りだつたが急に歸れないと云ふ譯ならばお代さんを東京へ連れて行つて東京で婚禮をさせても宜い、和郎の方の都合で孰れにでもするから急に歸國するかそれとも此方から東京へ出やうか、二つに一つの返事をして呉れると斯ういふ譯だ、ナント小山君、僕は實に困つて了つたよ」と正直なる男だけに途方に暮れて泣かぬ計かり、小山も意外の妨げに驚きけるが當人程に失望せず、「大原君、然し斯う云ふ事は本人同士の意向によつて決するものだ、君が其事を不承知だと云つたら強ゆる譯になるまい」大原「ところが子、東京邊ならば本人の心を聞いた上と云ふ事もあるが、僕の郷里の習慣では一切本人にお構ひ無し、親達の心次第でサツサと息子の嫁を極めて本人の知らない處へ明日は和郎のお嫁さんが来るよなぞと出し抜け

に宣告される風だから子、此の手紙だつて相談では無い宣告だ、異議の申立が出来ない宣告だ」小山「それにしても血族婚禮は生理上に害がある、モ―一層社會が進歩したら従兄弟同士の婚禮は法律上で禁ずるかも知れんと云ふ有様だ、其事を君から委しく通知したら君の御両親だつて御諒解にならん事はあるまい」大原「それは随分諒解せんでもないが何にしる向ふは本家此方は分家、僕の母が本家から財産を分けて貰つて僕の父を養子に貰つた次第だから両親に諒解されても本家の人達に諒解されんと両親もそれを拒絶する事が出来まい、随分事が面倒だよ」と平生の元氣も消え失せて獨り心を苦しむる、世間未だ斯る事情の跡を絶たざるもあるべし、

## 第六十七 實行の任

親友の小山は斯る事情を聞いて今迄の意氣組も俄に失せたり「大原君、それでは何うする子」大原「サア何うしやうと思つて昨夜から思索して居る、僕は固より最初から其従妹と婚禮する心は無い、殊もお登和さんの事が極まつて中川君同胞が僕の為めにそれ程迄盡力せられると聞いては僕も感泣して其恩に酬ゆる積りだ、それに就ては郷里の方へ何と云つて返事を出したら可いか、其事に苦んで居る、尋常一様の返事では迎も承知する氣支が無し、と云つて僕は偽りを構へたり事を工んだりするのは大嫌らだから嘘は言つて遣れず、有の儘の事情を述べて両親の反省を乞ふより外に仕方が無い、有の儘の事情を述べれば郷里の方では只僕の我儘だと思ふ計りで正當の理由と認めて呉れんから子」小山「然し大原君、そこが少し我々と外の人と違ふ處だて、我々文學者は社會の悪い風習や野蛮な舊慣を改良して世人を善道に導かねばならん天職を持つて居る、父母の意見計りで我子の承諾も無いのに嫁を決定するのは悪い習慣だ、お負けに血族婚禮は生理上に乖いて居る、支那では同姓を娶らすと云つた位だから昔風の老人にも其譯は解るだらう、君は社會を改するべき文學者の天職としても生理上に背いた悪い習慣に従ふ事が出来ん、文學者自ら人の道を実行する事が出来なければ如何にして世人を感化し得るだらうと、第一に其點を述べて御両親に反省を求めたら何うだ、習慣に従ふのと道理に従ふのと孰れ

が重いと云ふ場合である、外の人なら便宜上習慣に従ふ事もあらうが社會を改良すべき文學者の責任としては何しても道理に従ねばならんと云ふ意味を委しく書て進げたら何だ子」大原「ウム、それも書くが子、其代り道理上から云へば父母の承諾無しに子が肆に嫁を定る事も出来ん、従妹の方を斷つたために兩親が若しお登和さんの事を不承知だつたら僕は到底婚禮が出来ん」小山「それは感情から來るのだ、感情は多く道理と背馳する、君がお登和さんと結婚すべき正當の道理があれば御兩親もそれを拒絶さるべき譯は無い、拒絶され、ば間違つた感情から來るのでそれは充分辯明しなければならん」大原「それが子他人の事だと辯明も出来るし勸告も出来るけれども自分の事を親に向つて道理だの理屈だのと言出しにくいから子、殊に僕は親だの伯父だのに向つて反抗の言葉を吐く事が出来ない性分で、假令自分の方に正當の理由があると思つても向ふは長老の言ふ事であるし、自分よりも經驗に富んで居るだらうし、自分の強情を張ると後に悔ゆる事があるだらうと思つても何でも長老の意見に服従する方が多い、だから僕の口より道理を争ふ事は實に六か敷いよ、誰か親類の人に僕の方の賛成者があつて兩親を説いて呉れると可いけれども爾んな人も無し子」小山「僕が君の御兩親を知つて居ると飽くまでも説付ける、けれども知らんから困る、では斯うし給へ、今云つた道理とお登和さんの事情と有の儘に委しく書いて兎に角も君の御兩親に一應東京へ來て戴いて先づ本人のお登和さんをよく見て貰ひ給へ、爾うすれば従妹を貰つたよりお登和さんを貰つた方が遙に優しだと云ふ事もお分りになるだらう、僕も君の御兩親と御懇意になつて一生懸命にお登和さんの事を勸告しやう、そこで話が纏まれば丁度御兩親御立會の上で直ぐ婚禮も出来るから尚ほ好都合だ、爾う云ふ風に手紙を出し給へ」大原「成程子、爾うしやうか知らん」と飛んだ苦境に陥りしものかな、

## 第六十八 村の譽れ

此は奥州の山の中、都を離れし片田舎ながら村中にて指を折らるゝ大原の實家、家も邸も手廣くして人出入さへ多き中に去年當家の若旦那が大學校を卒業されて文學士と云ふエライお方になられたげなと評判

隣村にまで廣がりしより取分け人の訪ひ來る事多く主人夫婦は應接に  
 違あらず「イヤ是れは八兵衛さんよくおいでだ子」八兵衛「ヒエー、  
 マア今日もお天氣で好い鹽梅です、時に若旦那様はまだお歸りになり  
 ませんか、わしは若旦那のお歸りには花火を澤山揚げべいと思つて去  
 年から狼烟を十三本拵へました、お歸りの日が分りましたら何卒早く  
 お知らせなすつて下さい」と語る後方に若者の權臟「ヒエー、わしは  
 若旦那のお迎ひに一の關邊りまで参りますべいと思つて、ヒエーまだ  
 お分りになりませんか」と誰も彼も皆な若旦那の歸期を問はざる無し、  
 此の村より東京へ留學して假にも大學校を卒業せしは唯一人、その一  
 人のために村の名譽は隣村を壓する計りと村中の人皆な大原學士の為  
 めに一大祝典を擧げん事を思ふ、大原の父母も鼻が高く一々來客に接  
 して俸の事を吹聴する、後れて來りし半白の老人大原家とは同格の家  
 柄と見えて横柄にツト庭先へ入り來り「ヤア今日は、満さんはまだ歸  
 るとも歸らねいとも分らねいか子、多分歸つては來めい、だから私は  
 若い者を東京へ出すのがイヤだと云ふのさ、旨く行かなけりや途中で  
 錢を費つて始末に了ない道樂者になつて了ふし、旨く行つて少しでも  
 出世するとモ一國の事を忘れて了つて以上たつても歸らない、それ  
 にな、東京で女に引かゝるとモ一駄目だよ、悪い女で無くてモ東京で女  
 房を貰つたら自分は歸つて來る氣がつても東京の女なんぞは斯んな田  
 舎へ引込む氣は無いから子、國の事なんぞは夢にも見なくなつて了ふ  
 だ、満さんは本家のお代さんと縁組する筈になつて居るそうだから國  
 の事を忘れる氣支もあるめいけれど、斯ういつまでも歸らねいのを見  
 ると何だか少し怪しい様だ、堅いノゝと云つたつて東京には好い女が  
 あるからなあ、此道計りは何うも別だよ、今頃は何んなものが出來て  
 居るかも知れねい、此村が海にならうと川にならうと滅多な事で歸つ  
 て來そうも無いのう」と餘計な事を言ひ度がるも村での口利き、一度  
 は村會議員に出た程の人物なんめり、大原の父は少しく不平の色あり  
 「イ、工俵に限つて決して爾んな事は無い、大丈夫だ、あの通りぼく  
 ねん人だもの」老人「それが當にならねいだよ」と兎角何事にも反對  
 する癖あり、折から門の方より足音高くドシノゝと入り來るは本家の  
 娘お代さん、先に大原が小山の妻君に話せし通り、どんぐり眼に團子  
 つ鼻、赤ら顔に縮れつ毛、大兵肥滿の大女なれども鬼も十八の娘盛り  
 とて薄黒い顔に白粉をコテと塗り、太き地聲を細く殺して「伯母さん

今日は「と妙に氣取つて歩み来る、口の惡き老人其顔を見て笑ひ出し」「イヨお代さん、大層おめかしだ子、東京の満さんに嫌はれめいと思つて此頃はめかして計り居さつしやる、だけでもお代さん駄目だよ、満さんは東京で可愛いノ、女が出来て居るとよ」「お代驚き「アラ、ホント」老人「アーニ、出来たらうと思つてよ、マア折角めかさつせい、左様なら」とイヤにクスノ、笑つて歸り行く、お代は今の言葉が氣になる様子「伯父さん、満さんはまだ歸らねいのう」とさも其の歸りを待つ如し、

## 第六十九 長手紙

村中の人よりも誰より彼よりも一番熱心に満の歸りを待ち詫げるは此娘なり、満が此村より出で、文學士と云ふエライ者になりたるさへ村中一統の譽れなるに我身そのエライ人と縁組せんこそ此上も無き譽れぞと玉の輿に乗る心持「伯父さん、満さんはいつ歸るとも言つて來ねいのう」と心持にそくはぬ物の言ひ様、伯父は幾分か眉を顰めてその思慮無きを疎んずる色あれども伯母なる人は親身の姪とて其心根を哀れに思ひ「今度こそモ一直きに歸るよ、歸つて來なければ和女を連れて東京へ行く事になつて居る、今迄は和女の事を何とも爾う云つて遣らなかつたから満も歸る氣にならなかつたらうが、今度始めて和女の事を爾う云つて遣つたから屹度大悦びで歸つて來るよ、歸つて來なればモ一何か返事が來さうなものだ、返事の來ないのを見ると屹度自分が歸つて來るよ」とお代には何事も隠さぬと見ゆ、お代は厚き唇をまくり擧げて嬉しそくに笑ひ「早く歸れば宜いなあ」と後ろを振向きて思はず門の外を眺むるに門外より入り來れるは此村の郵便脚夫、背戸の方へ廻らんとするをお代がトダノ、と庭口より走り出で「何處から來たのう」と自分が手紙を受取りて伯父の前へ持ち來り「伯父さん、満さんの手紙よ、何と云つて來たらう、讀で御覽な」と禮儀も知らぬ山家育ち、伯母も側へ來り「手紙をよこす様では東京へ來いと云ふのか知らん、何と云つて來て」と左右よりの催促、伯父も養子の身の上とて伯母に逆らうこと成り難くてや封を披きて二三行讀み下し「エート東京邊は追々暖氣に向ひ候へども御地は未だ寒さ烈き御事と

存候處御兩親様始め御本家の伯父上伯母上お代どのまで御一同御無事に御暮し被遊候由何よりの御事と奉賀候、次に小生儀も息才に能在候間御安心被下度候切先頃の御書面は委しく拝讀仕候、それに就き、ウム、ノ、ノ」と俄に口籠りて後は口の内、伯母は戻かしく、「歸ると云ふの、歸らないと云ふの」お代は失禮にも手紙の上に顔を突出して覗き込み「マア長い手紙子」と窃に本文を讀まんとするに伯父はクル／＼と其手紙を巻いて了ひ「アハ、ゐんまり長いから奥へ持つて行つて緩々讀まなくつては譯が分らん、お代ちゃん、胡桃餅でも拵へてお食いな」お代「胡桃餅なんぞ食ひ度くない、満さんは歸へらないのう」と手紙の後を讀まれぬが氣にかゝる、伯母も氣にかゝりて聞き度くはあれど老いたるだけに手紙の文のお代に聞かせ難き事あらんを察し「お代や、胡桃餅を拵へやう、和女金槌を持つて來て割つてお呉れな、丁寧に頭から割らないと中の身が取れないよ」と胡桃を前へ持出してお代と共に割りかける、伯父は奥に入りて我子の手紙を讀み始めぬ、細字にて認めたる長文の手紙、中には議論文もあり嘆願書もあり、一たび讀み了りて復た繰返し、再び讀りて思案に沈み、「斯う云はれて見ると俣の言ふ所も無理は無い」と兩眼を閉ぢ腕を拱きて默然たり、横合より顔を出す伯母「満の處から何と云つて來たの」

## 第七十 父の同情

妻に問はれて伯父なる人は其の手紙を示し「満からは斯う云つて來た、從兄弟同士の婚禮は大層悪いと云つて西洋の學者が色々な證據を擧げて居る、自分は苟も文學者となつた以上には世間の人に好い手本を見せて悪い習慣を廃めさせなければならん、お代さんの事は誠に難有く思ふけれども爾う云ふ譯だから何卒思ひ留まつて下さい、それに今の學説では遠方の人と婚禮する程良い子が出來ると云つて居る、丁度自分の同學生の妹が去年長崎から出て來て東京で嫁入口を捜がして居るから其の人を貰ひ度いと思うが一應御兩親にも其の人をお目にかけて御許しを受け度いに就いて何卒父上様と母上様とで御出京を願ひ度い、自分も此の頃下宿屋生活を廢めて其の同學生の住んで居る近隣へ家を持つたからお兩方が御上京になつてもお宿を申すに差し支へ無いと斯

う書いてある「伯母は聞く内に顔の色變はれり」「ソラ御覽なさい、先刻李兵衛さんの言つた通りだ、いつの間にか東京で爾んな女に引か、つてそれで何と云つても歸らない、だから私が言はない事じゃない、去年卒業した時此方へ歸らなければ此方からお代を連れて行つて直ぐに婚禮させなければ屹度魔がさして禄な事にならないとあれ程八釜しく爾う云つたでありませんか、それで無ければ早くお代の事を言つて遣つて滿の心を極めさせて置く様にと私がヤイ／＼言つて居るのに、ヤレ今は歸るの、手紙では解らないのと今迄黙つて居たから斯んな事になつて了つた、従兄弟同士の婚禮が悪いの善いのと云つたつて此の村では昔から他村の人と縁組をしない、皆んな親類同士で縁組をするから大概な家では従兄弟同士が夫婦になつて居る、それが悪いとは聞いた事が無い、ナ―二滿が東京の悪い女に引か、つてお代がイヤになつたから爾んな事を言ふに違ひ無い、イヤだと云つても親達が無駄な事だ、今更何と云つても承知するものか」と到底理屈は此人の耳に入らず、伯父は幾分か我子に對して同情あり「それに子、お代ちゃんがモ―少し女らしいと無理に勧めても構はんけれども、大學校を卒業した文學士の夫人としては少し何うも不似合な處があるから子」伯母「何ですとえ、何とお言ひです、お代が不似合ですと、何處が不似合です、丁度従兄弟同士ではあるし是程好く似合つた物は無いでありませんか、それに何でせう、貴老も承知してお代の事を極めたのでありませんか、今になつて爾んな事を言ふのは滿の鼻負計りしてお代を見捨てるお積りですか、東京の怪しい女を納れさせて滿の嫁にする積りですか、滿は本家から半分づ、學資を出して貰つてそれで卒業も出來たのに今になつて爾んな事が言へた義理でせうか、貴老だつてよく考へて御覽なさい」と伯母の怒りは容易に釋けず、伯父は頻に伯母を宥め「マア爾う一圓に怒らんでも宜い、ナニも滿が私達に黙つて自分の好きな女を引入れたので無し、兎も角も東京へ來て本人を見て呉れると云ふのだ、私と和女と二人で東京へ往つてよく滿とも相談した上に仕やう」伯母「相談とは何の事です、是程極まつて居る事を相談もナニも要るものですか、東京へ往くならお代と一緒に連れて行つて直に婚禮をさせませう」伯父「お代ちゃんは今後からでも呼べる」伯母「イ、工直ぐで無くつては不可ません」と二人が頻に言ひ争ふ彼方にヒーツと泣聲の聞えて大きな身體がドタリと畳に倒れたる様子、伯母は顧み

「お代やお泣きでないよ」と言へどお代はオイ／＼泣きながら起上り、  
どんぐり眼より大きな涙をポタリポタリ落して我家の方へ走り行く、